

校長室だより



平成22年(2010年)6月29日

校長 箱家 勝規

かかわる姿勢と待つこと

木曜日の全校集会で、私は、「人に対して、からかったり、いじめるような行為は絶対に許されない」「人を傷つける行為を絶対にしてはいけない」「人ごとではなく、自分の問題として考えてほしい」と生徒に向かって訴えました。

先週起こったことは、ある男子生徒の「からかい」から始まり、その生徒が興奮してきて、怪我をさせる事態にしてしまったからです。私たち教師は、これまでのことをふり返り、見落としてきた小さな「からかい」や「トラブル」をきちんと注意したり、指導していくことを生徒に伝えました。そして、「だからこそ、小さなことでも先生に知らせてほしい」と強く訴えました。

生徒は、神妙な面持ちで、しかも緊張感を持って私の話にしっかりと耳を傾けてくれていました。

学校では、安心して通学できることと、学び続けるための心地よさが必要だと私は思っています。これらのことを通して、生徒の「情緒の安定」がはかれ、学級や学校での人間関係づくりがうまくいくようになり、学習に向かう姿勢ができたりするのだと思っています。

ただ、毎日のことですから、家のこと、友達のことなどで心配事があったり、また、いやなこと、失敗したことを悩んでくよくよしたりすることもあります。そんな時には、情緒が不安定になり、気になって、今すべきことが手につかないこともあるでしょう。

ところが、生徒はそんな心配事を必ずしも話してくれるわけではありませんので、教師や保護者などの大人に伝わってこない場合があります。

たとえ小さな「からかい」や「トラブル」があったときでも、そのことを聞かせてくれるようになるには、教師や保護者などの大人が、タイミングよく声をかけてかかわる姿勢を示すことが大切だと思います。しかし、時には話しかけてくれるまで待つ姿勢も大事だと思っています。沈黙をこわがらず、そしてゆったりと待つ時間を共有できるときに、両者に共通の響きが生まれて、自分の言葉にできることがあるかもしれないからです。

相反する難しいことかもしれませんが、多感な時期だからこそ、そのような対応が必要だと思っています。

